

大津 歴博 だより

2003
No.50

資料紹介

大津絵 青面金剛



「しやうめんこんこう青面金剛」は、大津絵の仏画の中で最も遺品の多いものの一つです。その理由は、庚申講の本尊として多用されたから、といわれてきましたが、庚申講で実際に使用されていた報告は、今までありませんでした。ところが、市内旧雄琴町で行われていた庚申講の本尊に、大津絵「青面金剛」が掛けられていたことが分かりました。行事の中で、生きた形で大津絵が発見されたのは初めてのことです。制作は江戸時代後期頃と考えられます。



大津市歴史博物館

生きていた大津絵

「雄琴庚申講」

庚申講とは

庚申は、「かのえさる」の日を指し、一年でほぼ六回あることになり、年によって七回や五回となります。この庚申の日に講員が集う行事が、庚申講です。

庚申信仰は、中国の道教から生まれたもので、人間の体内には三尸虫（さんしのむし）が住んでおり、庚申の晩その人が眠ると、体内から出て天にのぼり、天帝にその人間の悪事を報告。人の命を縮めると考えられていました。ですから庚申の晩、三尸虫が出て行かないよう徹夜する風習があり、日本へも早くに伝えられています。仏教の影響からか、民間にも広がり、江戸時代には全国各地に日待ちをする庚申講が作られました。本尊は、仏教的な解釈では「青面金剛」、神道的な解釈では「猿田彦神」の図像が使われています。

また、特別な機会があると「庚申塔」と呼ばれる石塔が作られることもありました。

市内にも多くの庚申講が伝えられているようですが、実態の把握は今後の課題です。ここで紹介する庚申講も江戸時代に始まったようですが、

資料は残されていません。

雄琴の庚申講

旧雄琴町には、いくつかの庚申講があります。大津絵の青面金剛を伝えていた庚申講は、雄琴二丁目付近に居住する中の九軒で構成され、以前は、庚申の日ごとに、宿を順番に勤め、青面金剛の軸を掛け、酒を飲み、話をするのが行事の中心でした。

ここでは、庚申は農業の神様と考えられており、田んぼの話をするのが、庚申の晩の常で、日が変わるまで帰ってはならないとされています。講員は、みな農業に従事しており、田んぼのことは一番の関心事でしたから、意義ある晩だったようです。年に七回庚申がある「七庚申」の時は、最後の庚申の日に餅を搗いで祝いました。

しかし、農業の機械化が進み、講員の職業も兼業農家が増えてくると、庚申で寄る意義も薄れ、昭和四〇年代から、年一回、年末に寄るように変わってきました。この頃には日も、講員の寄りやすい土曜日の夜などに変更されました。しかし、世代も少しずつ変わる中で講を続けることも難しくなり、いつからともなく「講を休もうか」という話が出て、ついに平成一四年一二月の庚申を最後に休止ということになりました。

この庚申講には二幅の軸が伝えられています。一幅は、大津絵の青面金剛像、もう一幅は明治

二五年入手の青面金剛像で、仏画として流通していたものようです。おそらく大津絵の軸が古くなったため、新しい軸を購入したのでしょうか。この大津絵は、一八世紀後半の作品と思われる。大津市内でこうした大津絵の仏画が見つかる可能性が、今後もあるのでは、と期待されます。

(和田 光生)



最後の庚申講の様子 床の間に二幅の青面金剛が掛けられ右が大津絵の青面金剛

四月十五日。三井寺大衆率_二数百兵_一。打_レ停比_二淑神社祭使并御供奉雜人等_一。移_レ祭新宮。訪_レ其事_二。是去正月彼社踏歌之_一。大津下人供奉之間。聊_レ有_二小事_一。稍被_レ陵辱。雖_レ訴_二山家_一。全_レ无_二裁許_一。仍大津下人等触_レ怒於三井寺大衆云云。自今以後。永停_二彼御社之所役_一。偏欲_レ勤_二仕此新宮之所課_一者。為_レ休_二此訴_一。押_レ留彼祭。云々。是以_二山上大衆殊致忿怨_一。乱逆騒動。

これは「扶桑略記」永保元年（一〇八一）年四月十五日条の記事です。この記事の要旨をまとめてみるとおおよそ次のようになります。

三井寺（園城寺）が数百の兵を率いて比叡神社（日吉社）の祭使ならびに供奉雜人を打ち止め、祭（日吉祭）を新宮（長等神社）へ移して行おうとしました。これは、もともと宮中の正月の年中行事である「踏歌節会」を日吉社でも行っている、「大津下人」とよばれる人々が祭を供奉していたのですが、この年の正月に催された際、少々問題が起こり、それがもとで「大津下人」たちは日吉社から「陵辱」を加えられるという事態が起こりました。この時の日吉社の仕打ちは「大津下人」たちにとって耐えがたいものであったらしく、日吉社の上部組織ともいえる延

暦寺に訴えましたが、延暦寺からは何の裁許も下されませんでした。このため「大津下人」たちは、三井寺に対し、日吉社の所役をやめて長等神社に勤仕したいと申し出たため、三井寺は兵をもって日吉祭を押し止めました。三井寺のこの行為に対し、今度は延暦寺が激怒し、大事件に発展していきます。

事件はこの後六月になって、三井寺が恒例の神事である日吉祭を闕意させではならないと命じた朝廷の宣旨に従わなかったとして「違勅罪」に問われ、延暦寺の三井寺焼き討ちという結果で幕を閉じます。

このことは「百鍊抄」永保元年六月九日条にも記録されており、こちらは簡潔に同年四月に行われた日吉祭のとき、園城寺の僧が神供ならびに職掌人を抑留したため、延暦寺が園城寺の寺塔房社を焼き払ったことを記しています。

事件の発端となった「大津下人」とはどのような立場の人々だったのでしょうか。彼らは日吉社の主に神事に関する雑役に従事していたと考えられますが、注目すべき点は彼らが勤仕する先を長等神社に移すことにより、日吉社で毎年行っている祭すらも長等神社に

移すべきであると園城寺が考えた点でしょう。つまり、「大津下人」たちは実質的な祭の主体であり、彼らの去就そのものが祭をどこで行うかを決定するものだったといえるのです。古代の地域支配は土地に対してではなく、そこに居住する人々を通じて行われていたと考えられています。この事件から三十年ほど経過した永久年間には、日吉社に属する「大津神人」がいたこと（『中右記』永久二年三月十二日条）や三井寺に従属する大津の住民がいたこと（『同』永久二年三月十二日条）、三井寺と日吉社に仕える神人がそれぞれ別にいたこと（『同』永久二年六月十四日条・同十六日条）が確認できます。これらの人々がこうして史料に登場するのは、三井寺と日吉社ひいては延暦寺による大津の住民の分割支配が進んだ結果であるとする、先の事件が起こった永保年間には、「大津下人」たちにその勤仕先を自らの意思で選択できる余地が残されており、こうした住民支配が確立していなかったと考えることができます。ここに紹介した史料からは、後に権門とよばれる大津社による大津の支配権争いの一端を垣間見ることができそうです。

（山崎 和宏）

第31回三企画展

大津の古文書と 近世堅田の水運

■4月15日(火)～6月1日(日)

中世後期(室町時代)以来、琵琶湖の水運を支配してきた堅田は、近世に入ると、天下統一をはかる織田信長に水軍として重視され、その傘下に入りました。その跡を継いだ豊臣秀吉は、同じく琵琶湖水運を重視しましたが、軍用ばかりでなく年貢米輸送にも琵琶湖水運を活用するために大津を重視し、「大津百艘船」の制度を設けると共に、船奉行を設けてその支配に当たらせました。その結果、堅田は、琵琶湖全域での伝統的特権を弱められ、大津と共に船奉行の支配を受けることとなりました。

しかし、堅田は、その後徳川家康が天下を握り、江戸幕府の時代となっても、大津・八幡と共に、「諸浦の親郷三カ浦」として、江戸時代を通じて、湖上水運を主導する地位を保ちました。

本展では、堅田の船道郷士四家の筆頭であった居初家に伝来する古文書により、近世堅田水運の歴史を紹介します。



浅野長吉控書

第32回三企画展

大津の遺跡と 真野遺跡

■6月3日(火)～7月21日(祝)

真野遺跡は、真野六丁目に所在する遺跡です。平成五年から平成八年にかけて実施した発掘調査で、縄文時代早期の土器・石器や古墳時代中期の木棺直葬の古墳、後期の横穴式石室の古墳、中世の遺物などが出土しています。

この中で、古墳時代中期の古墳(真野古墳、四世紀末～五世紀初頭)はこの調査で新たに発見された古墳です。琵琶湖を一望のもとに見渡せる丘陵上に造られた直径約二〇mの円墳で、墳丘中央部から長大な割竹形木棺(長さ約八・二m)が見つかっています。木棺内には、これまで大津市域では出土例がない埴輪製舟形容器・同埴輪形容器をはじめ、振文鏡・勾玉・管玉などが副葬されていました。

このように、従来室町時代だけの遺跡と考えられていた真野遺跡は、縄文時代にまで遡り、古墳時代には有力者の墓も築かれていました。本展では、出土遺物や遺構の写真パネル等により、当遺跡の姿、移り変わりを紹介します。



真野古墳の埋葬施設全景(東から)

歌川広重「栄久堂板」唐崎夜雨の背景

「大津事件」の当事者、ロシア皇太子ニコライが、大津の遊覧で立ち寄った名勝のひとつが唐崎の松でした。この松は、『万葉集』に収録された柿本人麿の歌をはじめ、奈良時代以降、多くの詩歌に詠まれてきました。また、唐崎の地は、平安時代には清浄な場所として、祓所（はらいと）のひとつにも数えられ、多くの貴顕の参詣もありました。

さて、時代は下って江戸時代中期の終わり頃。当時は二代目の松がその威容を誇り、松の繁栄と長寿にあやかろうとする人々ばかりでなく、女性の病にも御利益があるという信仰が高まって唐崎大明神と崇められ、参詣者が増加したようです。『近江名所図会』（寛政九年（一七九七）に描かれた「唐崎明神」を見ると、鳥居前から西近江路へつづく参道付近には店が軒を連ね、多くの人々が往来しており、その賑わいぶりが窺われます。その参詣者目当てに、唐崎神社では松を描いた大々判（三六cm×四九cm）の摺り物を販売し、販売していました。これまで筆者は、その摺り物を二例確認していますが、それらに歌川広重による近江八景「栄久堂板」の唐崎夜雨を加えて眺めてみたところ、興味深い推測が沸いてきました。

まず、図1は安永（寛政十年（一七七二）九八）

の版行と推定されるものです。描き手は、当時の京都における名門絵師、長谷川等潤。神木を描いた摺り物なので、絵師と神社の印が実際に捺してあります。その描写からは、龍が巨体をくねらせたような幹や、全方位に広がる枝振りの見事さを見て取ることができます。摺りが鈍いのは、かなりの数が摺られ、売れ行き好調であったことを物語っています。ちなみに、この時点で、松のスケールは、おおよそ、東西三〇間、南北三八間（一間約一・八二m）と記録されています。続いて図2ですが、江戸時代の京都文化人名鑑であった『平安人物志』（文政五年・十三年版、天保九年版）にその名がみえる福地白英（円山派絵師）が手がけた摺り物です。文政（天保期（一八一八）四四）の制作と思われる。その描き方は、等潤画（図1）に比べ松葉繁みが様式化しており、整った樹形になっています。ただし、松のアンケルは大差なく、等潤画に比べ北斜めから眺め、大きく枝を広げた神木が懐に社殿を抱く構図をとる点、同種の摺り物として制作されたことは間違いないでしょう。そして、ここで注目したいのは、松のスケールが、白英画（図2）の記録では東西四〇間、南北四八間と、とも

に一〇間もアップした数字となっている点です。これは、松がさらに生長したためか、それとも、松への信仰が加熱したことによる誇張なのか興味深いところです。

さて、第3の摺り物の代わりとして、広重の「栄久堂板」唐崎夜雨に眼を向けたいと思います。広重がこの図を含む「保永堂・栄久堂板」近江八景を手がけたのは、ヒット作の「保永堂板」「東海道五拾三次」の直後、即ち天保五年（二八三四）頃です。白英画とその時期が重なります。広重はその生涯に二〇種前後の近江八景物を手がけていますが、なかでも、最も情景描写に優れ、その芸術性を高く評価されているものがこの「保永堂・栄久堂板」であり、さらに比良暮雪とこの唐崎夜雨は、近江八景の絵画における絶景のひとつといえます。同板の描写は、広重が手がけた他の近江八景物と比べ実景に近く、すぐれた臨場感をみせているのですが、とりわけ唐崎夜雨にみる巨松の存在感は際立ったものとなっています。筆者が推測するに、この描写は、白英画の摺り物がヒントとなったのではないでしょう。つまり、広重は、何らかの形で摺り物を手入れし、それに基づいて唐崎の夜雨の情景に仕立て直したのではないかと推測です。それ

までの唐崎の松は、湖中に突き出た盆栽を上空から見下ろすように描くのが通例でした。画面いっぱい松を扱い、黒々とした姿を正面に据え、背景の湖面から突き出た堂々たる構図は、「栄久堂板」が登場する以前の作例では確認できていません。つまり、樹木自体の巨大さやその存在感についてクローズアップしようとする視点は、従来の名所絵は持ち合わせておらず、ただ摺り物だけが、神木の樹齢や巨大さを尊崇するために必然的に持ち合わせていた視点であったことがうかがわれます。したがって、なぜ広重が、その視点を持つことができたのかを考えると、彼が摺り物を入手したからではないかという仮説に至るわけです。もともと、広重の作画が、白英画の丸写しではないことは、作品を比較すれば明らかです。広重はこの松の枝振りの特徴を三次元的に熟知していたかのように、北側の湖上から眺めることによって、従来描かれることのなかった見事な樹形を発見していることがわかります。ともかく、着想は摺り物から得た可能性はあるにせよ、本領である情景描写の点については、

「保永堂板」「東海道五拾三次」の仕事によって培った表現力やイマジネーションの豊かさで、広重は見事な夜雨の情景を演出しています。そして、「栄久堂板」唐崎夜雨は、近江八景の名所絵の歴史において大胆な発想の転換を試み、新境地を開いたといえる作品なのです。ちなみに、この松は大正十年（一九二二）に枯死してしまいましたが、それ以前明治九年（一八七六）に唐崎の松を写生した岸竹堂の作品（やはり摺り物同様の構図）をみると、かなり樹勢が衰え、松葉が減少



図1 長谷川等潤画 唐崎大明神一ツ松之図 本館蔵

しているのが分かります。同時期、大久保利通は、あまりに荒廃した京の嵐山を目の当たりにして愕然とし、その時初めて、幕府健在の頃は名勝保全の資金が出ていたことを地元から聞き及び、名勝の保護行政の必要性を痛感したそうです。松も多くの手間をかけてその美しさが保たれる樹木です。もし、維新が、三・四〇年程早まっていたならば、衰えた松への参詣者も少なく、摺り物の版行もなはずです。広重の名作のひとつは、唐崎の松にとって、良い時期であったことにより生まれた作品といえるのではないのでしょうか。

（横谷 賢一郎）

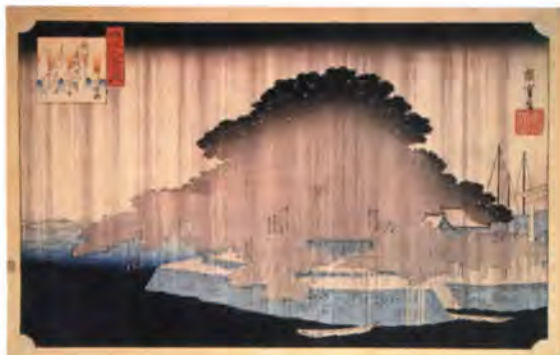


図3 歌川広重画 近江八景 [栄久堂板] 唐崎夜雨 本館蔵



図2 福地白英画 唐崎大明神一ツ松之図 個人蔵

大津歴博だより No.50
平成15年3月14日

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>